

新編水滸畫傳

四編

九



門 遠 21
號 875
卷 39

新編水滸畫傳卷之三拾九

東武 高井蘭山翁 譯編

明治三十二年
十月十日
購求

○假李逵の剪徑單人と却り

黒旗風李逵へ老母と邊々々々一旦故郷に向ひ沔水縣の近く來り
處城の西門の外一族の人聚て擄の文と見てありければ李逵も同
く諸人の内に雜て擄と讀と閉に第一名の正賊へ郟城縣の宋江第
二名の賊へ江州の戴宗第三名の從賊へ沔水縣の李逵と讀々まは李
逵あまを閉て大いふ驚き處に忽ち背後に人在て李逵が肩と
打て云々々々李公此に在て何とあすや李逵急ふ頭と回して其人を
見ると乃ち是早地忽律朱貴あり李逵問て云汝へ又何故此所ふ至
るや朱貴が云汝まづ我を從つて來まると二人同く西門の外の

新編水滸畫傳卷之三十九

近村小馳て一軒の酒店の内に入。朱貴乃ち李逵と指さして云。汝い
人そかく大膽。小榜文と看るや。今官司賞錢と出して云。宋江と捉ん
者。六万貫の錢と賞し。戴宗と捉へん者。六五千貫の錢と賞し。李
逵と捉へん者。六三千貫の錢と賞せん。とあり。然るに汝諸人と共に
榜文と見え。自ら禍と求るにあらば。や。宋長兄一向汝が禍と惹引え
んと。怕し。おひ。同郷の好まむ。おまむ。とて。則ち某と此所小馳て。汝の消息
と探聽し。あまふ。我の汝より一日遅く山と下り。共却て汝より
一日先。此所小馳。入。汝ハ又道中。何らの碍り有て。斯遅じ。
今日。茲。至るや。李逵が云。宋長兄。我が酒と飲。こと堅く制し。おひぬ
る。多。我道中。於て酒と禁。路と緩。と馳て。今日。此處。以。着し。ぬ。
汝の。と。此村。の人。あま。定て。此酒店。の主。も。知音。あ。人。宜し。一樽と

具へし。人。や。我。今日。む。先。禁酒。と。破る。朱貴が云。此酒店。の
乃。我。弟。朱。富。が。家。あり。と。則。呼。出。ま。え。れ。朱。富。遂。に
出。て。李。逵。に。對。面。し。早。速。酒。肴。と。設。け。て。款。待。す。李。逵。が。云。宋。長
兄。再。三。我。の。命。酒。と。飲。べ。と。禁。め。お。ひ。し。今日。曲。て。三
盃。と。酌。べ。と。と。ち。盃。と。取。て。飲。酌。と。始。め。己。日。も。晚。や。三。更。過。四
更。の。時。に。移。り。李。逵。盃。と。收。め。云。月。明。あ。る。乘。じて。宜
し。百。丈。村。小。馳。べ。朱。貴。が。云。汝。必。ど。小。路。より。行。と。あ。る。只。東
の。大。路。と。過。て。直。に。百。丈。村。小。馳。り。速。に。老。母。と。取。て。早。く。山。陣。に。飯。
多。と。て。再。三。此。と。と。叮。嚀。ふ。李。逵。が。云。小。路。より。行。時。道
甚。近。し。何。ぞ。大。路。と。過。ら。ん。や。朱。貴。が。云。小。道。の。辺。に。所。々。以。險。し。と
山。坂。有。て。虎。多。し。又。剪。徑。す。賊。あり。と。ま。る。大。路。の。遠。き。と。行。人

あは是全く無事あり人李逵が云我あんど虎と賊と怕るこあり
んとて終に朱貴兄弟に別れ直に小路より馳々るふ五更の時もや
立ち天色曉んとし李逵又數里の路と過て前向と望るるに深林
の内より一人の大漢子跳出て李逵に向て云汝此路と過らんや
速に若干の錢と苗ゆく路と買て過るべし若買路錢あくべ決
て通すまじ李逵此賊と見らぬ双の手に二の斧と持て面の色を墨
よりも黒し李逵大に怒て云汝何奴あまば此所は徘徊して前徑と
あすや彼漢子が云汝り我が名と聞ば忽ち恐懼して魂と飛し膽
と落まべきぞ我は豪傑の譽を高き黒旋風李逵と云者あり汝
衣と脱て悉く置行ば肯て汝が命を饒さん李逵是と聞て大いに
咲つ云汝いゆ何らの奸賊あまば敢て我が姓名と假するや黒

旋風李逵といふ乃ち我とあり汝ら手段と見せんとも朴刀と揮り
斬てゆく彼漢子大いに驚き戦ずて逃んとせ處に李逵早くも衝
入る地上に踢倒し則ち胸と踏著怒り罵て云汝妄りの我姓名と
織ひて万次に當る罪あり彼漢子が云某も姓は李とつとつとも
真の黒旋風にあらば君いゆと大名と天下に振ひまひて万人皆怕
とあはゆ某女りの君の大名と假て乃ち此所に在て前徑とあま
皆黒旋風の二字と聞時大に慄て行李と棄て逃走ふ此の人
命と害せしめて貨と得るもの某が實の姓名は李鬼と云て此前村に
居住も李逵益怒つ云汝擅に二の斧と使はつらん我今汝ふつ
斧と与へんとて遂に右の手に持する斧と奪取て幾乎に打掛んとせ
し愚に彼漢子大に慌て告ぐる君り我と殺し多る外に又罪あり

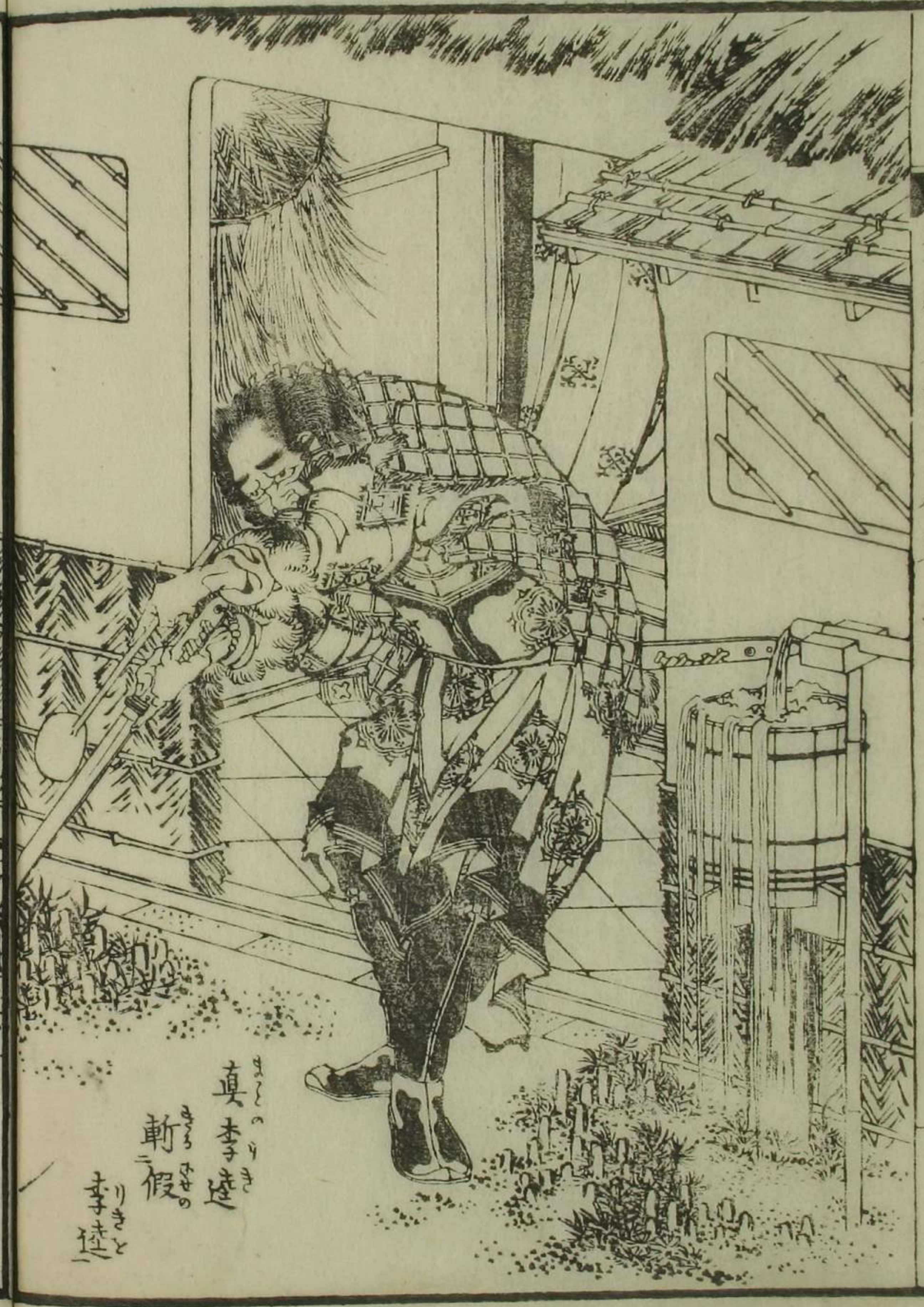
して死する者あり人李達が云我今汝一人と殺さん外に死する者
 あり人と云へい人彼漢子が云某のや剪徑をやしうるといふは
 ども唯恨らるゝ家貧ふして一人の老母と養ふと能はざるも頃日
 妾の君が大名と假て人と赫し専ら其行李と奪ひ取て老母と
 養ふ君の其と殺しあそむ老母の竟に飢死すべし伏して望ら
 くは一點の仁心と垂るゝと潜然と涙と流さ李達は原人成
 殺とことと樂とする豪傑あまも柔弱と助け老衰と憐む心元來
 十倍して厚く多し今彼漢子が詞を聞て暗に想道我偶母と邊へ取
 人為故郷に廻りぬかく孝道と盡と者と殺さば天地必ず我を惡
 るべし我先あまを免さるゝと則ち彼漢子と扯起して云我汝
 が孝と盡と感して今一命と免す自今以後必ず我姓名と塵すと

あつと彼漢子が云某今日より業と改め清浄の營とあり重
 て君の大名と汚さべし李達が云汝が孝順の心あり過ちと
 知て改へ乃ち汝が福あり我肯て汝を惠んとす一錠十兩の銀取出
 しあまを与へまは彼漢子地上に拜伏して大に感謝し遂に別れ
 て林の内に入るる李達自ら打笑ていそむ彼不幸やと我も遇定
 て一兵と失いつゝんとて又朴刀と提山坂の上の馳上り時々己が
 上刺に至りし李達酒食と求人と欲して左右と見るに只一間
 の酒店もあり百歩をり行て遙山の凹の一軒の草屋と見ゆは李
 達飛がてく跑て遂に其屋ふ至りし處に内より一人の女出て問る
 る貴客へいどうもよう来りまひいぞ李達が云我は是過路の旅人
 酒食と求人が為まに至るる我今一貫文の錢と汝を与へるれば我



竹編火舟遊傳卷之十九

五



竹編火舟遊傳卷之十九

真李達
 軒假
 李達

為に酒食と調んや。彼女が云此里の酒と求る所也。飯のそめらば
 我自らあまを調へて進らすべしと。頓て舟に入れば李達は又家の
 後に繞出て此辺と遊覧する處に一人の漢子此家と望で歸り來
 りしうば李達急に身と隠し伺ひ見ると舟より又彼女出て云るん
 大夫は何も遅く歸りまひしむ。彼漢子が云今日の不慮ふ死と免ま
 て再び汝も遇あり女大に驚きて云常々悦んで回るるふ。今日何
 らの禍に遇ひてかく云ふぞ。彼漢子が云今日一人の旅人ふ遇ひ
 必定利と得んと思ひしはあの料人や。其旅人は是真の黒旋風李達な
 りし。我是と云ふすして黒旋風の三字と以て赫々する。彼大に怒り
 忽ち我と踢倒して殺さんとせし。我詐して老母と養人爲剪徑と偽し
 大名と穢せりと決と流し告ぐれば彼全く是と信じ我命と饒す

のめあつば一錠十兩の銀と恵ぬ。彼女忽ち低言て云声と高め
 ろふか。今我家に一人の大漢子來て則門前にありん。丈夫暗に彼を
 窺ひ見ると若彼漢子黒旋風もあつば蒙汗薬を彼と害し
 ますと。夫婦議と定めぬ。處李達此言と聞大に怒り思ふや。彼
 が孝と感し。銀と恵し。却て我を害せんと圖む。思と知ぬ。小人ぞと云
 跳出唯一足の踢倒し。腰刀と抜て頭と刎。舟に入るとれば女の遂に
 ろむ。家の竹籠に旧衣裳と碎銀火。李鬼が身辺にあり。銀
 あつ。是と取集り一つ。三升の米飯熱し。これに菜蔬あり。
 李鬼が腿の肉と割て炙肉と。是と以て飯と多く吃し。一把の火を
 放て屋と焼拂ひ。李達は直に百丈村と望で馳行する。李達は遂に
 百丈村と望で馳行。暫の間。我家に至て母と見ると母は両眼瞎

生く。床の上にあつて。李達是と恠んぐ云々。李達回りぬるに
母何由多眼と開く見まらぬぞ。母是と関く半悦ひ半哀て云々
へ。汝久々異郷に在て。禍と免まらぬ。今日何由又回りくるや。我
汝が支の常々悲々。両眼も己に哭瞎くと開と能は。我此間貧
きと病との両苦に逼り。一言もいふ事と知るべ。然まども汝
が兄能清貧と守て。邪の事とあさぬ。我頗る心と安んて是と悦
ぶの。汝縦い何らの艱難と受るも。必と非道のこととあして。徳と傷
ふとあま。只あは汝の今何の所在や。宜く我に告て心と安んせ
し。よ。李達あを聞て。心中に思ひ。我母の本老實の人あま。され
り。梁山泊に在るといふ。必定悦び。あま。先あまを詐ん。や
と。則ち答て云々。我の今大ひある幸いと得く。官職と授ま。此

も急。我此度母を邀へん。為自ら家に回りぬ。母是と関て大悦ん
て云。汝己にわくの。で。人ぞ。莫太の福ひ。我敢て汝が請に應せ
んと思ふ。須く兄が歸るを待べ。と未と云も。終らるる。李達え
や。歸り。李達則ち拜して云。長兄久々。遇ざり。に。弥恙
あま。や。李達大に怒り。云。汝何由又回り。又来て我と苦く。あ
んと思ふ。母が云。李達今ハ官職と授つ。我と邀んが。為家に回りぬ
汝卒尔に怒るとあり。李達が云。母必と彼が言を信。う。あ。彼
昔日人を殺して。若干の禍と我に被ら。頃日又梁山泊の強盜ら
と通同して。共に斬罪人と奪ひ取。大に江州と開して。軍民と殺し
今彼ハ梁山泊に在る。専ら民と害し。人と傷ひ。九族滅亡の大罪と
犯す。是に依て。江州の文書。諸国に行を。緊く。彼と搜し。求む。我又

ころある連累を蒙むらんも料りぐときにも汝李達早々梁山泊に往て
 再び家に回るとありま。汝若遅々するに於てハ我速うに汝と捉へく官
 司に送るべきぞ。李達云。長兄何ぞ怒りあふや。只宜しく我に随つて
 山陣に上りて我よく長兄と樂しましめん。李達大に怒り汝何ぞか
 く大膽あるや。と忽ち門外に走り出るとま。李達想道彼今門外に
 出るとハ必然我と捉へんと。友と語らふあらん。あう。早く馳回らん
 みてと。則ち一錠五十兩の大銀と床の上ふ遺し置て云。我兄ハ原家
 貧ふして終に五十兩の銀と見るとま。彼再び回りて此銀とま
 へ必ず悦んぐ我と追ふとあう。と遂に母と背ふ負く小路の上
 馳行る。

○黒旋風沂嶺に四の虎と殺す

李達ハ隣家の人十四五人と催し。再び家に入る。李達と捉へんと計
 り。處に母も李達も見へる。只床の上に一錠の大銀あ
 り。李達心中に察して云。李達今此銀と遺し。必
 梁山泊より入大勢來つ。母と山陣に携へ行。疑ひあ。若跡と暮
 らく追蒐バ却て一命を害せらる人。只よく穩便するべし。と衆
 退散し。李達ハ猶李達が追來るともや有らんと思ま
 只顧乱山險地と擇て走り行。己に嶺下に至りて。天色晚し
 李達心中に思ひ。嶺下に至るとも李達いま見へる。必
 必定追てと休つ。然れども此處ハ沂嶺と云て。險阻の惡劣あ。ハ
 夜の更なる先。一足も早く急んと。老母と背ふ負て忙々嶺上
 へ登り來。母ハ目盲。これハ道の險惡も。時刻の明闇も。さうふ知り

行遍之許畫傳卷之卅九

がこし。母云我甚と渴は。水と求めく飲しんや。李逵云先暫く待久人嶺と過て人家ある所至りあは茶とも飯とも進すべし。母云我今口中に半點の涅ひありて。渴に勝がこし。汝唯須らく嶺上に登つて水と求め飲し。ちよ然らずんば。今我實に渴し死す。李逵あまこと聞し。漸嶺上に登り。母と青石の上に卸し置て云く。母暫くあられ在て待久。我少刺水と尋ね來らんとして。遂に澗の内にへり水と求人く。くまきとも。一つの碗瓢もあらず。まきまきあられあまことゆせんと。東西と望み見ふ。山の頂きた。一つの草庵見へ。まきまき李逵大に悦び急に跑上りて。庵中とまら。一個の人もあらず。して四方をく顔敗れ。幸ひ佛前ふ一つの香爐有し。まきまき李逵頓てあまこと取。再び溪辺に下つて。一香炉の水と昏取。又嶺上に登つて。青石の上とま

るに母のや見へ。まきまき李逵是と見て心甚と疑ひ能く。これ血あがきて道とつて。ひまきまき其血の跡と越ま。一向尋ね行し。處に。この大ひある洞の口。至りて其内と見ふ。この小虎あつて。人の腿と噉ふ。李逵心中に想ひ。まきまき我此まきまき母と山陣の邊へ。樂ませんと欲し。漸此所まで背來りぬ。まきまき却て虎に噉ま。まきまきまきまき憾あまきまき小虎が噉ふ人の腿。まきまき我母の腿にあ。まきまきまきまき是誰が腿あ。まきまき我今此虎と殺して。母の仇と報えんと。忽ち鬚と倒し。立て。遂に彼小虎二足と斬殺し。又親虎と尋ね。暫く徘徊し。まきまきまきまき處に。山坡の邊より。この母虎大に吼て狂ひ來り。まきまきまきまき李逵急に腰刀と揮て。又母虎が頭と斫劈。まきまきまきまき處に。俄に松の樹の蔭より。一陣の恠風起り。木の葉と吹散して。恰も雨のまきまきまき李逵忙まきまきまき是とまきまき。又一つは

大虎跳出て直ちに李逵と望んぐ狂ひくる。李逵少くも怕ず。又腰刀と振う相迎ふ。彼大虎牙と張爪と舞して跳入し處に李逵傍に閃りと避て勇力に任せ打刀もやも虎の眉間に斬込し。彼虎霹靂のどくに吼り。遂に身揮して死にゆく。李逵暫時の四虎と殺し。猶洞の辺に至り良久く搜くるに漸氣力疲まき。再び彼草庵ふ入り。愁添ふ眼も合は。翌朝洞ふ至て母が腿其外骨と拾ひ包袱ふ畏。泗州大聖庵の後の土と穿て。彼骨もと埋め。愁傷不堪難つ。嶺と過て馳來りぬる處に五七人の獵戸。都て此所に在て。弓箭と携へくる。忽ち李逵と見て大ひに驚き。則ち問て云。汝は是山神か。いあらずや。いんぞ只独此嶺と過て來りぬる。李逵答て云。我は是旅人。昨夜母と携へ此嶺と過りくるに。母再三水を求めぬる由。我母と嶺上ふ安置して。溪ふ下りし處に豈知らんや。虎來て母を食ひぬ。此由多に我洞の辺に尋行て。兩の小虎と二足の大虎とと殺しぬ。獵戸らよの事と聞て。都て信せず。云う。汝一人の力を以て豈よく四の虎と殺さんや。古の李存行と子路とら共は是勇力くるといふ。ども只一虎と殺しぬるの。此嶺の二足の大虎は尋常の虎と同じ。らば我が輩官司の命と受。彼虎と殺さんと。圖をとも。未だよの事と得ず。汝假令鉄石の人。うとも馬。そよく四の虎と殺さんや。李逵が云。汝も。あまこと信せず。いんば我汝らと引て死虎と看す。人きぞ。獵戸らが云。汝實の虎と殺せ。あま我重く汝と謝せん。とて頓て胡哨吹し。片時の間に五六十の獵戸ら四面八方より馳集り。即ち李逵ふ。隨つ嶺上に上り。遂に洞の辺に至て。此處とくるに。果して四の虎

大虎跳出て直ちに李逵と望んぐ狂ひくる。李逵少くも怕ず。又腰刀と振う相迎ふ。彼大虎牙と張爪と舞して跳入し處に李逵傍に閃りと避て勇力に任せ打刀もやも虎の眉間に斬込し。彼虎霹靂のどくに吼り。遂に身揮して死にゆく。李逵暫時の四虎と殺し。猶洞の辺に至り良久く搜くるに漸氣力疲まき。再び彼草庵ふ入り。愁添ふ眼も合は。翌朝洞ふ至て母が腿其外骨と拾ひ包袱ふ畏。泗州大聖庵の後の土と穿て。彼骨もと埋め。愁傷不堪難つ。嶺と過て馳來りぬる處に五七人の獵戸。都て此所に在て。弓箭と携へくる。忽ち李逵と見て大ひに驚き。則ち問て云。汝は是山神か。いあらずや。いんぞ只独此嶺と過て來りぬる。李逵答て云。我は是旅人。昨夜母と携へ此嶺と過りくるに。母再三水を求めぬる由。我母と嶺上ふ安置して。溪ふ下りし處に豈知らんや。虎來て母を食ひぬ。此由多に我洞の辺に尋行て。兩の小虎と二足の大虎とと殺しぬ。獵戸らよの事と聞て。都て信せず。云う。汝一人の力を以て豈よく四の虎と殺さんや。古の李存行と子路とら共は是勇力くるといふ。ども只一虎と殺しぬるの。此嶺の二足の大虎は尋常の虎と同じ。らば我が輩官司の命と受。彼虎と殺さんと。圖をとも。未だよの事と得ず。汝假令鉄石の人。うとも馬。そよく四の虎と殺さんや。李逵が云。汝も。あまこと信せず。いんば我汝らと引て死虎と看す。人きぞ。獵戸らが云。汝實の虎と殺せ。あま我重く汝と謝せん。とて頓て胡哨吹し。片時の間に五六十の獵戸ら四面八方より馳集り。即ち李逵ふ。隨つ嶺上に上り。遂に洞の辺に至て。此處とくるに。果して四の虎

李堂
 斧ヲ持ッ
 ヲ横ニシテ
 味画
 大異ヲ
 教トシ
 芥ヲ
 便ナ
 コレガ



所 福火 詩 畫 傳 卷 之 七



黒旋風
 殺子
 大
 虫

新 編 水 滸 傳 卷 之 七

斬殺されくありきまば諸人大に悦び頃て四の虎と搥て村に下りし衆は
村中の貴賤悉く出て李逵と迎へ直ちの曹太公と云者館に導ひて宜
しく李逵と款待する曹太公乃ち虎と殺しける所以と問はる李逵
始終り詳うに語りけるに諸人は是と聞て衆皆大に驚きぬ曹太公又李
逵が姓名と問ひされば李逵詐て云某姓は張あく諱はあはる人皆我
と稱して張大膽と云習はせり曹太公が云誠小大膽の勇士あり若
かこのこそ大膽にあはるべしうんぞよく四の虎と殺さんややく
いよく奔走と尽しける此時村中の男女々々曹太公が館に至り
都て群と成し隊と揃て死虎と見物もあはれ又李逵小殺されと
るかの假李逵が妻は彼日此村に逃來つて父母が家に在るを此日諸
人ととりぬ曹太公が館に至つて虎と見物し不図李逵が堂上の

あつと見て大ひふ驚き彼虎と殺しける漢子の平しく我夫と殺し
ける黒旋風李逵あり宜しく父母に告て夫の仇と報えんと思ひ
忙しく家に飯て父母に告て云々々々彼虎と殺しける大漢子
は則ち我夫の仇人梁山泊の賊黒旋風李逵あり我が為に彼を害し夫
の仇と報えりや久父母是と聞て大に駭き慌て來つて里正の如くと
告るる里正是と聞て云々々々其黒旋風李逵と云のの昔日百夫
村々人と打殺し其後又江州より官軍と多く殺して大罪を犯し
江府より彼と尋るると尤嚴ありり彼と捉へる者六百三千
貫の賞錢と賜るるんとあり彼今當村に來るると幸あれ暗に
曹太公と呼で商議せんと遂に人と馳々まば曹太公頃て里正が家
に至る里正則ち曹太公に告て云々々々今虎と殺しける勇士は昔日

百丈村あり人と殺し頃日又江及び罪を犯せし。黒旋風李逵と云者ありよ。今官司より彼と捉へんとす。と嚴重にして己に三千貫の賞錢とつけ彼と求む願ふ。曹太公宜しく商量し。曹太公のつとめて彼勇士の官司の欲捕者ありと。然らば彼と捉へんと易らるべし。然るも万一人差とせば却て禍と惹出すに似たり。先詳らるに其實と糾し其後彼と捉ふべし。里正が云今此所一人の女あり能彼と見知り。此女は原李鬼と云し者あり。前日黒旋風李逵曾て李鬼が家に来つ酒食と求めらる。何のゆゑもあらず。李鬼と殺して屋と焼く。とあり。曹太公が云彼果して黒旋風ふ違ひあらず。計ごとく以て捉ふべし。其計はかくのどしと低言すれば衆皆大に悦んで神妙の策ありと。同じく。曹太公再び家に帰り李逵に對して云らる。豪傑先寛りと坐して酒と酌多くと。新に酒宴と設け再び飲酌と催し。諸の獵戸ら再應李逵と勧め。大盃ふて飲し。やうら曹太公又李逵に對て。豪傑此虎と官司に送て恩賞とん多し。や李逵が云我は是路と急ぐ旅人あり。恩賞と念とせず。只一刻も急に打立べし。曹太公が云うんぞ敢て豪傑に謝せ。人少則村中より錢財と湊て送るべし。彼虎は又自ら官司に献せんと。未だ云も了らざるに村中の獵戸ども悉く酒肴と携へて李逵に送り。一々盃を取て相勸む。李逵夢も計と不知して擅に大飲し。宋江が示しゆる言語全く是と忘れ。約莫二時がうら。と李逵大ひふ爛醉し。前後不覚の躰に。くまを。諸の獵戸ども頓く李逵と扶け椅子の上に坐せし。則ち二筋の大索と以て恰も粽のどくりに李

逵と

達と縛りたる。此時曹太公の里正ら若干の人と縣裡に馳て討つ。又李鬼が妻とも同じく縣裡に遣はさる。知縣此支を聞て大に驚き。即ち里正にも命じらる。黒旋風李逵の謀叛人の同類の者を尋常の罪人と一列あらず必だ鬆せしめてあまを逃すべし。里正ら云李逵原勇力の豪傑たるも若誤つて取逃すとてりやあらずと思ひ未だ縣裡に送らばまづ千筋の索と懸。曹太公の家を置て緊しくあまを守らる。ぬ。知縣あまを聞早速當縣の都頭李雲と云者と廳前へ呼ぶ。命じらる。沂嶺の下の曹太公と云者が家より黒旋風李逵と捉へ置らる。汝多く人と引く彼地へ趣き。李逵と監押して縣裡に引來る。必だ村里と鬧がしめ。彼を逃すとてあらず。李雲命と奉て廳前と退き。頃て二十人の土兵と催し。各軍器を持

直ちに曹太公の家と望んで馳來りぬ。此沂水縣の本窄き所なれば。今李都頭馳向く。李逵と縣裡に引渡すとあつ。諸人皆是と傳へ聞て。其沙汰専らあり。朱貴此消息と聞て大に驚き。舎弟朱富に對して云らる。黒旋風果して禍ひと惹引し。己に今活捉せらる。計と以て彼を救はんや。宋公明彼が禍を引出さんと恐れ。乃ち我と此所を遣はして。消息を聞し。あまひぬる。我れ彼を救はずんば。何の面目あつ。再び山陣に皈らんや。朱富が云。長兄先我言と聞て。彼都頭李雲の原來武藝の達人あり。四五十個の人よりとも。彼に敵せらる。能は。我ら兄弟兩人空しく虎の勇とあらずとも。いんぞ。彼に敵せんや。李逵と救はんと思ひ。あま唯智と以て取べし。力と以て取べし。幸ひ李雲某と愛し。常々某に鎗

棒と指南のさしをよろく某の計あり今晚二三十斤の肉と十五樽の酒とを調へ其内に蒙汗藥を入我長兄ととのり半途に出で李雲と待彼己に李逵と引て至りあは我彼の酒肉を進めよあまこと用ひし衆人悉く毒に中らん時我輩其便機ふ衆として李逵を救ふべしあらば此計のいり人朱貴が云此計極めく神妙あり宜しく速にあまこと行ふべし若李逵を救ひあは汝も共に梁山泊ふ入り同く富貴と娛しめ朱富あまこと閑く其言に服し則ち又高議して云我輩果して李逵を救ひあは半途より直に山陣ふ上るべき間預め妻子資財と車にのせ先道中に出して待し人とも頓て妻子どもと車にのせ則ち兩人の家僕と従かめ其夜三更の時にもや道中の遣りして消息と待しめうへ己にして朱貴兄弟兩人ハ酒肉の内に蒙汗藥を入

數箇の人ふあまこと持しめ己ふ半途に打出るなり時や五更も過て天色漸明る處に忽ち金鼓の聲響て二三十の土兵ども李逵と監押し引來る李雲ハ一乗の轎小坐して相従ふ諸の土兵どもも朱富が前に至りしうへ朱富頓て相迎へく云うへ某老早此所に出で都頭と待しぬと自ら一盃と捧げ轎の辺に至りしうへ李都頭急に轎と下てあまこと謝して云賢弟何もあかく懇懃のあつまで出迎へるや朱富が云某聊一點の誠と表すのれ何ぞ敢く謝に當らんや李雲遂に盃と取て其半と飲で半と刺しうへ朱富再三強うへ李雲のめと酒量浅きめあまきりふ辞してあまこと飲す朱富又一塊の肉と取く献ぐうへ李雲其懇懃あると感して是と吃せり朱貴又盃に酒と醃肉と添く諸の土兵らに与へ一々あれ

と飲しめり。此時李逵ハ朱貴兄弟がめく行ふと見て其計策と
ることを知り故意詐て云々。汝ら何ぞちと我も与へて飲しめど
るや。朱貴責て云汝ハは大罪人あり何ぞ酒肉と汝に与へんとて甚
ど悪く〜答へり。扱李雲ハ土兵らと見て呼々。汝らも路
と急ぐべしと未だ云も終らざるに土兵ども都て手癱足麻を尽く
一度の倒し〜李雲是と見て我計の中りめつよかとして己に刀
と抜んとせし處に覺び己も渾身麻を同く地上に倒し〜朱
貴朱富各刀と揮り酒肉と吃せ〜者どもと四面八方へ追散
遂に五六人斬伏ぬ李逵此躰と見て勢ひ乗じて呼々〜處に絆
の索一度に破落離と断し〜李逵土兵ら刀と奪ひ取李雲と望
み断てかゝる朱富急にあまをと扯往て云必ず李雲と殺し〜此人ハ

我が為ふハ武藝の師やて人とあり尤好し。汝ハ先あまを棄て一向
先に行き入李逵答て云我り〜曹太公と殺すんべい〜此窟と
雪んと飛ぎ〜の追かくる此時曹太公里正あらびに李鬼が妻等ハ
李雲に従て此所まで来り〜今李雲ら毒薬中り〜と見て
急に逃走らんとせし所は李逵電の〜追来つ〜つひ曹太公里
正李鬼が妻等悉く斬殺し其外二三十人の獵戸も過半。李逵が
手の下に斬殺され〜朱貴朱富兩人ハ忙々〜李逵と呼て云
々々。我輩速に山陣に回る〜とて己の小路と臨で半里〜馳
々々處に朱富忽ち嘆ぐと云々。我師李都頭ハ人〜尤善ある
に我が計に落され縦ひ酒毒醒〜も。つらんぞ再び知縣に見へんや
必定後と慕〜我輩と追蒐べし。我ハ原來彼が懇志と蒙り〜と

あまの独此所に待て宜く諫めを加へよ。梁山泊に誘引すべし。朱貴が云汝が言尤可あり。弥諫言と盡して必と山陣に誘引せよ。然らば人彼却て知縣に罪せしむべし。惜しむか一人の豪傑何ぞ空しく是を殺さんや。李逵長兄此所に留て朱富と助けよ。我の馬馳て家族らも車の跟べし。遂に兩人と此所に留て朱貴の先車と追て急ぎ入り。李逵朱富兩人此所に留て己の一時計待居る處。果して李雲刀と輪して飛がて追來り。大音声ふ呼で云る。強賊走るとあり。李逵此勢ひの猛きと見て。同じく刀と揮て躍り出。遂に兩人鋒と交へ相戦ふ。己の八九合に至り。更に雌雄分とぞり。處に朱富刀と入り兩人が間に隔り。乃ち呼つて云る。兩人の豪傑まづ戦と休て我が一言と閑より。兩人あまを閑忽ち双方へ

分まし。朱富先李雲に對して。慇懃に云る。某曾て都頭を愛憐と蒙りて。鎗棒と学びし。平生洪恩と感ずること。浅う。然るに。我兄朱貴。今梁山泊にあり。宋公明の命と受て。李逵が消息を閑し。此所に至り。李逵己に活捉を。縣裡に送らんとす。是と救はずんぞ。再び回つて。宋公明。いま人。是に依て。是らの計と行ふ。都頭と誑きぬ。先の李逵都頭と殺さんとせしむ。某是と制して手と動し。只土兵らと殺し。其ら急に逃走らば。今時分。若干の路を過るべし。然るに。我都頭は。厚恩。浅う。感ずるも。故意。此所に扣て。都頭の。趕來り。今と待受ぬ。都頭。知見。明らか。人。言。知り。今己に。李逵と。走ら。手。刺へ。許多の。土兵らと。失ひ。多ひ

朱富止李
雲李達周



めるに、いづれぞよく再び回つて。知縣にまゝにまゝにや。若再びび回
 りまふあつて、必定知縣より罪せられるべし。あうが今日某らや
 しのり梁山泊に入らひ。晁天王宋公明ととのり義を結びあふ。是
 則ち万全の計あり。あうが尊意のいづれ。李雲是と関、暫く沈
 吟して云、賢弟の諫ハ可ありといへども。只山陣に我と留まらば。朱
 富笑つて云、都頭何ぞ山東の及時雨宋公明の大名を関あり。彼
 人専ら賢と招き士と納め。天下の豪傑と盟と結びあふ。いづれを都
 頭と容は。いづれんや。李雲是と関嘆息して云、我今家あまこと
 奔り難く。国あまことも投ぐる。只悦ぶる。我の軍と妻子あり
 ざれば、官司に恐る。あうが。我肯て汝ととのり梁山泊に趣くべし。李達
 是と関、忽ち打笑て云、うら。都頭のよく山陣に上りる。則自家

の兄弟あり。とて互に禮と行ひ。三人同く。車と追て馳行。に半
 里むらり。ふ至り。朱貴相迎へて。大いふ。うら。あび。四人の豪傑奔
 く。車に跟く。急ぎ。うら。梁山泊も近う。處に馬麟鄭
 天壽出迎へて。云、うら。晁宋両頭領未ど全く。心を安んじ給
 へ。我輩と下して。足下らの消息と探聴しあふ。今己に恙な
 く。回らふ。上へ。我ら兩人ハ先山陣に回ら。かくと訴へ。とて。兩人の
 頭領ハ先へ山陣に入り。次の日。四人の豪傑ら。遂に山陣に上り。聚
 義廳に至り。朱貴先。李雲と引て。晁宋両頭領にまゝ。いづれ。と
 云。うら。此人ハ則ち沂水縣の都頭。姓ハ李。名ハ雲。綽号ハ青眼虎と
 云。あう。とて。次に朱富と引て。同く。諸頭領。見え。いづれ。此者ハ某
 が弟。朱富。綽名ハ笑面虎と云。あう。とて。始終のしと語り。くれ。

新編 刀傳書 卷之七

十一

李達も又假李達と殺し、かむびに四の虎と殺し、ころころとく
 り、語り、各一笑と催し、晁宋両頭領打笑つ、云々、李
 達に四個の猛虎と殺され、今日山陣、又兩個の活虎と
 添し、ころころとびて大ひに酒宴と設け、飲酌と始め、時、
 兵用進み出て、や、今山陣甚と繁昌し、四方の英雄風と望で
 馳加、皆晁宋両長兄の徳あり、近來山陣の事業、尤大ひに
 して、旧日に同し、猶須らく、三ヶ所、酒館と設け、専ら世
 間のことと探聴し、預め先官軍と防ぐの計と備ふべし、乃ち
 西山の方、童威童猛に十餘人の山兵と添し、酒肆を開き、
 又南山の方、李立に十餘人の山兵と与へ、酒肆と建し、北山
 の方、石勇に十餘人の山兵と従し、酒肆と設け、都て

朱貴が酒店の、水亭と修補、則ち號箭と射し、其用、
 と辨ず、又山前、大関と設け、杜遷にあまんと守らし、
 又陶宋旺に港と堀せ、水路と修理せ、又蔣敬、一山の
 勘定と掌せ、蕭讓、一山の関文等と掌せ、金大堅
 一の圖書印、信兵符等と雕し、侯健、一の鎧衣袍旗号等、
 造らし、李雲、一山の房屋と掌せ、馬麟、一の大小の兵船と
 造らし、宋万、白勝、一の金沙灘、陣と張し、王英、鄭天寿、
 一の鴨嘴灘、陣と張し、穆春、朱富、一の陣中の兵糧と掌し、
 せ、呂方、郭盛、一の聚義廳と守らし、宋清、一の専ら筵宴、
 ことと掌し、せ、己に一分、拵定り、諸頭領、先聚義廳
 の會合し、一連に酒宴とせ、山陣、大ひに熱鬧し、あま

新編小説書庫卷之廿九

り梁山泊より益夜只軍の蒐引戦ひの勝負等の支のり学ん
て怠らば官軍を來まご。一々麀ふして目に物見せ賊官
らる肝と飛しめん。拳と捏て待たる。一日宋江へ晁蓋兵
用其あらの諸頭領と閑談して云々。我輩今日都く大
義にあつまつとくども。独公孫勝のまゝ。四ら亦彼向に約諾し
四五ヶ月のうちに必ず帰山すべしと云ふ。今己に若干の日を經
ぬまども。曾て消息あつた。必然迷ふ所あつて願く戴院長公孫
勝が家に趣き。彼が虚實と探問よろ。誘引して來ら
んや。戴宗関し早速命に應ずべしとあり。宋江大いに悦び
果して戴院長行より。必む旬日の内に其消息を聞べしと
て。其日の衆皆聚義廳と退散し。翌日戴宗の旅装とあり。梁

山泊と離れ。彼四の甲馬と双の腿に挂著。遂に神行の法と行きて飛
がどくに走り去。直ちに濮州と望ん。己に路と行くと
三日やして。沂水縣の界に至り。人々拳て黒旋風李逵が取
沙汰。區々あま。戴宗あまを関て。心中に冷笑。過る人。扱是
より飲馬川の山陣ふ。又強盜あつて。小賊を集め。頭領聚義廳と設
け。寨と構ふ。次巻と見え。

論者いそ。前の編武松が景陽岡あ。酔後虎と殺と段ふ。
猶戸のめが驚く。云詞。并ふ此虎の尋常の虎に異あり。又
信せ。其場に至り。果して死虎を見。彼へ里正の宅にて音
待。是へ曹太公の館へ導く。事へ別あ。趣向大いに似。又
朱貴朱富李逵と救ひ。都頭李雲共。朱富が眷屬と載る車

に跟て。沂水縣より梁山泊へ三日のちどに行着し。然るに戴宗公孫勝と尋るに梁山泊と云く三日行て沂水縣と過るやあつて梁山泊より沂州の道程分別志ぐときりのう。神行の法に一日八百里と行戴宗も三日とへ神行の法あることと此所り至て作者忘却しるるや

新編水滸畫傳卷之三拾九

書
新古賣買所
藉

編者神と謂ふあり
著人の作者あり
亡誤十八番や
あはれりし
なるや

